

孤独に沈むとき

詩篇142篇

あなたはわが避け所、生ける者の地でわたしの受くべき分です。どうか、わが叫びにみこころをとめてください。(5、6)

表題に「ダビデがほら穴にいた時に」とあるように、この詩はダビデが敵に負われ、窮地に陥っていた時のことを背景にして書かれたものと思われます。

詩人にとつて最も大きな心の痛みは、自分を顧みてくれる人が誰もいないということでした。「わたしは右の方に目を注いで見回したが、わたしに心をとめる者はひとりもありません。わたしには避け所がなく、わたしをかえりみる人はありません」(4)。どんな人も誰か自分に関心を持つてくれる人を必要とします。人は完全な孤独に置かれては生きていくことが出来なくなりませす。このとき、詩人は神に向かつて叫びます。「どうか、わが叫びにみこころをとめてください」。誰もわたしに心をとめてはくれなくても、あなただけはわたしに心をとめてくださいませすよね、と言っているのです。ここに詩人の救いがありました。誰からも顧みられず、頼るべき人がいないときも、神は避け所となつてくださったのです。詩人は神こそ避け所であり、常に顧みてくださるお方であることを発見しました。このお方を天に持つ者たちは、たとえどんな孤独に置かれようと、絶望することはありません。

わたしたちもダビデのように、「自分に心をとめてくれる人などいない」と嘆くことがありますでしょうか。常にわたしたちを顧みていてくださる主を仰ごうではありませんか。